

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第2章の概要(1)

大島 由紀夫*

(Accepted October 24, 2011)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* III. 2 (1)

Yukio OSHIMA*

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* III. 2 (p.429 l.1~p.454 l.7). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome', not 'translation'. The epitome mainly treats Jaun's, or Shawn's sermon to 28 Rainbow Girls (girl students) and his sister Issy.

Key words: *Finnegans Wake* Part III. 2, epitome

さっそうとした出で立ちのジョーンは—以前に私が知っていたジョーンと変わりはない—次に立ち止まり、難儀をくぐり抜けながら夜通し動かしてきた、厚底靴に収まっている何よりも重要な足に一息入れさせ、(至るところで、彼の活力の大きさと同じくらい広大な領域で、どのような靴であれ乱暴に扱われた靴に対し、人間的いたわりをもって扱うことで彼は有名であったがゆえに)彼の靴下が作られるずっと以前に目立つことなく作られた傷のある左右両方の靴を、レイザーズ・ウォーク近くの堰で緩めたのだった(どうか神の御子が、この哀れな歩行者を見下ろすことがありますように)。彼は樽に乗っておそらく180時間あまりかかる距離をやってきたのであり、実際そうするだけの価値が彼にはあった。すなわち、もっと近づいて見ると、真平になった格好で彼はそこにおり(昨夕ベッドに横たわっていた幼児が發育するような大変な速度で、慈悲深い神の助けはすぐさま空間に満ち、急速にその体系を發展させていくが、それほど速さでその瞬間もすばやく過ぎ去るのだ!)、その表情は以前よりもずいぶん明るくなっていた、とはいえ、彼自身慣れていた、確固とした自我を持っているイメージを相変わらず持っており、足がまだ眠っていたにもかかわらず—そのような状態で彼は思考した—、聖ヤヌアリアスのおかげで、汗をかきつつも楽しげで、アイルランドを歩いてきた彼の半長靴の中の足は牛のように大きく、つま先も本当にすばらしい形だった。この多弁な詩人は、普通よりも目立った金髪、安息の番人である一人の警官ジガードセンの体【実際は柱石のこと】にもたれかかって休んでいた(靴で汚した芝生をうろついたので休むことを、こうした退役軍人ほどうまく行う人間はどこにいるだろうか)。ジガードセンは、気持ちよさそうにうたた寝をし、老オズボーンのように体をまっすぐにして

【死んだように】埋まっていた。彼は病院の裏で夜の勤務中に、酔ってビンを独り占めにして抱え、寝ぼけ眼で躓いて転び、そのまま眠ってしまったのだ。

[430] さてベネント・セント・ブリジッド国立夜間学校青空学級の29人もの娘たちが(というのも【2月が29日ある】閏年がどのようなものか、彼女たちは思い出そうとしているように思えたからだ)が、実際川岸に座り、人生の教訓について、その警告に反発しつつ、午前中木の下で、黄色い石のような道標のように目立っている最初の人のごくまれな姿(熊かしら、猪かしら、あらゆる鳥の王様かしら、私たちが荒野で出会った悪漢ハンフリー卿かしら!)に心引かれながら学習していた。そしてまたその一方で、かろうじて10歳代であり、その最盛期にいる彼女たちは、若さをみなぎらせて一カ所でふざけあつたり、娼婦たちのチャーミングな指がどのようなものか言い合いながら、魅力的に58本の足の歩調を合わせ、川の浅瀬をわたった。とはいっても彼女たちは、丸太のように寝ている者のいびきには嫌悪感を覚えていた。この者は相変わらず地べたに張りついているように見え、度々よだれを流して(醜悪!)、見るところ身動きすることなく、王に差し出すために見つけた宝物について、彼のオランダ人としての母国語で、愚かしくも「俺のすばらしいボトル、こいつが一番だ」とつぶやいていた。

ジョーンは(彼は先ずてっぺんが補強されてある帽子を取って、これ以上はないほどに行儀をよくした女の子たちの賞賛の合唱の中、全員にお辞儀をした。彼女たちは彼が手にしてくれるキスの意味を探ろうと、皆我先にジョーンのいるところへと一斉に走り出した。彼女たちの最高の若さと彼のバラ色の気取ったほほえみのために、バラバラになって走ってくると、大騒ぎして彼に近寄り、もみくちや

* Department of Maritime Systems Engineering, Faculty of Marine Technology, Tokyo University of Marine Science and Technology
2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

にして、彼の縮れ毛、黒顔の人形の巻き毛のようなその巻き毛を滅茶苦茶に乱した。全員が、いや一人を除いて。そのフライアのような最も輝いている金髪の持ち主の女の子は違っていた。お盆一杯のクラウドベリーのタルトのような山盛りのラブレターを書き終わり（それはすばらしい、本当に非常にすばらしい、名誉あるものではなからうか）、太めの女の子は太めの女の子と、やせ形の子はやせ形の子と一緒にといった具合に二人一組で、彼から甘く漂う、全く天使から漂うような素敵な香り（素敵！）を微笑みながらかいだり、パン屑をまぜた野生のタチジャコウソウやパセリを味わったり（ああ、素敵！）、手紙が一杯つまって膨らんでいる郵便袋に非常に器用に触ったり、彼の陰囊を鳴らしたりしていた。というのも、ジョーンは若く16歳の若者のように見えただけで、彼に男らしさを感じた彼女たちは、まさにその親切な応対を受けてみて、彼が最も魅力あるレディーキラーそのものであるという感触を得たからであった。さて諸君、親切心から（やあ、みんな）彼は彼女たちの人形と彼女たちの挨拶の言葉に対してご機嫌伺いをしたのだ。（アガサの羊はどこ、とか、バーナデッタの鳩はどうしている、とか、ジュリエノーのうさぎちゃんはどうな具合、とか、エウラリーナのひょうきんなペットはどう、とか。）[431]そして次に彼は話を脱線させたまま（いい感じ！）、彼女たちの個人的な容姿について感想をいくつか述べたり、彼女たちの子猫ちゃんマークのきつい帽子や、ブロック風の粋なワンピースのドレスについて、実際の思いとは違う思いを口にしたりし、そして茶目っ気の女の子のあとではかみやの女の子に、アイルランドの伝説を読んだことがあるかと質問をした。また太腿がスカートの縁の下から見ると言って一人の女の子を優しく叱ったり、傍らの別の女の子に、スカートの後ろのホックが開いていて横目を見れば見えてしまうと、言い方に変化をつけて囁いたりした（もちろんまさに人間的な純粋な親切心と戯れの精神から、その場を取り繕おうとしたのである）。ところでジョーンといえば、彼は人間と呼ばれるものの中で最も純粋な人間になっていて（そうなければいいと私は思う）、サムソンの野良犬からヨナの小鱼までの、またミソサザイの王から微生物に至るまでの、神の創造物全体を愛そうとしていた）ジョーンは、こうしたいくつかの予備試験のあと、官能的な目を通して、彼の愛する妹のイジーが現われたのが分かった。というのも彼は、彼女が跳ねかける水の波から自分の愛を知っていたからであり、はにかむことにより彼女は愛の証拠を示したからである。そしてまた面食らってしまうほどに、そんなにも簡単に彼女のことを忘れてしまうことはできなかったからである。というのも、彼は彼女の祝福された名付け親であり、同時に兄だったからである。彼が（ブラボー）哀れな善良な真のジョーンが、これから別れを告げる彼女の優しい心を、全世界であり自分の命と思っていたことを誰が知っているか。

親愛なる妹よ、とジョーンは、学び舎をすぐにでも去る

うとし始めながらも、深い愛情を込めて時間を稼ごうと、言葉遣いと全体的な話し振りが目立って明確な真心込めた言い方で話しかけた。正直言って、私が立ち去るや、お前はきっと私がいなくて寂しく感じるだろう。しかし神の命で私が長い最後の旅にさまよい出て、私がお前の重荷でなくなる時が来ることは義務からの解放とを感じる。これはまぎれもなく、私の心を引き上げてくれたお前の教えの賜物なのだ。妹よ、お前はみんなに見せてやるべき、他のいかなる手紙よりも優れたすばらしい手紙を私に書いてくれたし、いつかそのうち（是非心に刻みたいと強く思っていることだが）手織りや勇敢な行為や人知れない死や父親などについての昔の話をしてくれるだろう。妹よ、これらのお前がしてくれる話は、何度も私の心を完全なまでに引き寄せる。算数の授業の生徒で、昔のあの家の中心人物だった私の愛する妹よ、あのとき幼い我々二人はベッドの上で幾度となく上になったり下になったりして（ああ、いついつまでも、この思い出が永遠に消えないように！）、ともに愛情で堅く結びついていられるように、[432]感傷に甘い言葉を乗せて横たわっていたのだ（あの晩のことはこれからも覚えていよう）。

ああ、ここに集まった美しい者たちよ、私は旅に出る！さあ言葉を伝え始めよう。輝かしい少女たちよ、こうした前置きはさておき、神の僕たちに対する導きに関して言うが、私はマイク神父に厳格な絶対禁酒についての助言を求めていた。彼は教区の司祭であり、雄弁なドミニコ会修道士であり、聴罪博士であり、カトリック聖職者であり、名誉神学博士である。彼（ちなみに彼は私の横腹をつつきながら、その場で思いついた説教の文句を口にしたり、また度々口頭で、我々のような似た者同士でとりかわされる打ち明け話をしてくれた。例えば二人の生娘に面と向かって、2ギンダーの金額をもらってミサの文句を唱えながら、教区の司祭である自分がどんなにすごい人生を送ってきたかを話し、その日はすばらしい日で最後に射精してしまったということ、そしていつでも瞬間的に私の顔を見るのと同じくらいにすばやく、私と永遠に結婚したいと思うこと、などを話してくれた）と私は、奉獻誦を詠ずるときの口調で、助言を君たちに与えようと思う。それは彼が私に言ったことだが、彼が再び司牧職に就く以前に述べたような、その助言によって彼が主任司教職に就けるような永遠に残る助言である。それは高みからの口調である。ダブリンの最高位の名義司教が、異教徒を管轄する名義司教に語る時の口調である。いいですか、皆さん、座ってすべての言葉を聞きもらさないで下さい！私にぴったりと付き従って下さい！私の言うことを心に留めておいて下さい！私の一連の言葉を理解して下さい！これはすべて、修道士が説教するときの、また塵一つついていない服を着た紳士が、一針も縫っていない服を着ている小間使いを前に放つような、実際の目的のための言葉なのだ。さて。この密やかに雨の降る季節から少しの間私がいなくなっている間に、魂の浄

化と免償に関して、十戒のうちのできるだけ多くをしっかりと心に刻んでおいてくれ。そうすれば最後にそれが正しい人生の道を歩むことについての、今までのものよりも優れた手引きであることが分かるだろう。我々読者はいまどういう状況にあるのか。歌うべき最初の歌は何なのか。典礼法規なのか、勅書なのか、イースターのための詩なのか、ゾロアスター経典選集なのか、さもなければ浅黒い痣のある、極端な暴力の場面に満ちた恥ずべき書なのか。有名なものであれ、聖なるものであれ、聖餐式を愛する者にとって、望むべき運命はどこにあるのか。【十戒はこうした問いについての手引きとなるであろう。】聖霊降臨節のあとの何日もの罪深い日々。こうした日々を送る忌避すべき仕え手は、祝福したあとと即追放するつもりだ。彼への慈悲のために私ができることはせいぜいこのくらいだ。前にも言ったように、経済的な行動だ。選ぶべき聖人の選択は、暦の中のあらゆる聖人から選べと言われても選ぶ余地のない選択である【私はマイク神父を選ぶ、ということ】。[433] イグナチウス・ロヨラのミサ通常文に始まり、雪の12月3日に「我の言うことを聞くべし」と最後の酷評を行った、海を越えた国のフランシスコ・ザビエルの特定礼拝式に至るまでの間から選べと言われても。ここに彼女、純白の服を着た乙女、天上人たる美しいイサベラがいる。29番目の、キスをしたくなるような娘だ。あこがれの女性！陽気なオトゥールの信頼に満ちた監督管区で、湖のある陰気なグレンダロッホにおいて（デンマーク語が話されている！）、聖餐拝受が行われる月曜から聖餐式が行われる祝祭日のシエスタまで優しく見守られた者【マリア】と同じ、いや似通った娘だ。愛らしき協力者である我が妹よ、葦のようなペンを耳に挟んで武装した、我々のあのひょうきんなインク男【シエムのこと】の至上のペンから採られた勝利に満ちた言葉をお前に送ろう。

君たちが花嫁を崇拜するほどに崇拜していた、遠く離れたところにいたあの夫婦のための、君たちがどこかに失ってしまったミサを蔑ろにしてはならない。聖金曜日を使うナイフにふさわしくないただの豚肉は食べてはならない。ホース岬の豚のような男に、君たちのキラニーのリンネルを踏ませてはならない。後生だからトランプ遊びはやめてくれ。男のダイヤモンドを相手の女から取り戻すまで、やる気を失ってはならない。ダブリン製パン会社のカフェテリアにある渦巻き模様のついたソファの端に座り、煙草を吸っている行商人相手のアラビアンナイト風のショーで歌われる『白い手足を彼らはからかうのをやめない』とか『マリーが男を疲れさせたとき、おてんば娘はマン島の女中であった』といった危なっかしい歌を歌って、大騒ぎすることが決してないよう肝に強く銘じておけ。ところで、エサウ株式会社のビスケットをかじって、そのあと箱の中に投げ戻すのは君たちか。なぜか缶の中がほとんど空になっている。第1に微笑むことなかれ。第2に愛することなかれ。最後に不義をおかすことなかれ。貞操帯が良心の呵責

を避けるのに役立つ。短くとも男性用トイレに入ってはならない。きたないソーサーと一緒にコーヒー茶碗を洗ってはならない。我々の最後の場所である天国への最短コースを、最初の人間であるアダムに尋ねてはならない。結婚の約束をしたからといって、処女膜を勝手にその男の手にいじらせてはならない！まさかりのソフトな側面に気をつけよ！渦巻き状のコード【蛇】とはにかみ屋の少女【イブ】と茂みの中の赤らみ【りんご】が、最初の男【アダム】の笑いを故意の殺人へと変えたのだ。ああ、愚かな二人！偶然の過ちとは！スーツの上にズボンをはいて地面を掘ってはならない。賄賂という鍵を使って黄金時代への門を開いてはならない。男にはぶつかっていけ。金にはつるんでいけ。売らないうちは相手の言い値を忘れろ。いいか、信頼していても跳びつく前に用心して調べろ。聖スウィジンのような人物の姿を見ないうちは、カリン【腐っているときに食べるゆえ、腐敗を表す】やリンゴ【誘惑の道具】に洗礼を施すな【聖スウィジンはリンゴに洗礼を施したとされる】。虫の好かない人物がいるところで酒を飲めば、いばらの茂みでそれを悔いることになろう。[434] 不道德な家庭生活を営んでいる者にかかわるときには、どうかことのほか注意してほしい。そうした家庭は男を弱める。店には冷静な誠意を、家では暖かい希望を持って。さらに家庭における思いやりには用心深くしろ。この場合、暴力を振るう者の会釈や過失といった美德よりも、夕飯を食らう方が概して気品がある。盗んだキスは返却せよ。不正な手段で手に入れたものとはっておけ。リダホーダとダラドラの二人の初な少女に頻繁に付きまとった黄色信号の危機を思い出せ。彼女たちはかつてベシー・サドローのために、馬の模型を使い派手な色合いのズボンをはいて男役を演じたが、彼女たちはこの有名人の食べるディナーを煮ようとして、石炭くべの穴に落ちるところだったのだ。ウィッカー氏は【壁に登って】壁の後ろに排尿した際、足を踏み外して、この壁のずっと下まで落下した。フェローマ家の人たちはその落下の姿がろうそくのようにであったと言い、ヘイズ、カンガム、ロビンソンは確かにタマゴであったと言った。彼に対して大いなる肯定を！耐え、認め、許せ。だまそうとしてだまされることを覚えておけ。ブリテン・コートに住んでいた亡きマンガン夫人のところから来たハルロッテ・キーを、マグダラのマリアの祝祭日に一晩中寝ずに私は埋葬した。彼女のことを嘆く人の涙を拭き、彼女を祭壇へと連れていく者など誰がしようか。彼女は若くして売られ、藁の上に寝て、1ペニーで買われたのだ。その教訓は、必要以上でも化粧することを怠るならば、ここから出ていって地獄に墮ちろ、ということだ。真の女性としての憤りに反するような無謀といえる病的なシャツやブラウスや、リムリックの恥となるレースのリボンなど、君たちのむくんだ脚で踏みつけてしまえ。確かに方々の穴を縫いあわせてだけの、物憂いローラのランジェリーを長くしたような、味気ない透き通るほど薄い洗い晒しの色合いのランジェリー

とは、概してどういうものだろうか。においのついた衣類は君たちの鼻や心を誘惑で満たす。虚栄から逃れよ、真実を恐れよ！悪魔の業だ！コルセットは君たちの心を荒ませるかもしれない（打ち捨ててしまえ、打ち捨てて！）が、しかし、ドルフィン・バーンのヨナや、君たちの共通のお目当てデイヴィッド・コパフィールドを喜ばすために、ユーリアのワインの広告板から、昔から好奇心を刺激してきたような一对の引き戸までの間、介護の祈りの文句を口にしつつ、密かに胸をはだけるようなことを決してしてはならない。（忌まわしい場所で！）場合に応じて、君たちはうつろな目で朝食の料理を運ぶカートをじっと見ているか、あるいは変身するまで、どうか互いに対面したままじっと座っていたまえ。というのも、君たちの短いスカートが彼の膝の上に落ちたならば、彼が立ち上がるまで、さて、どんなに彼の表情は邪悪になっていることだろうか。やがては大罪が犯されてしまう。しかしここに高貴な人物であり自称売春宿の常連客である芸術家アルジー【英国の詩人、スウィンバーンのこと】、またの名をスミス氏が再登場するであろう。悪徳に染まったキリスト教信仰復活運動家たちは、彼がブエノスアイレスの街中の、あるいはその近郊にいる芸術愛好家皆によく知られている存在だと言っており、[435] また彼が『ヴィーナスの汚れ』を見せに君たちを劇場まで連れて行き、非常に小さなささやき声で、上品なおおずおおとした態度で、非常に上品なちょっとした粋な言い方で、こう尋ねるだろうと言っている。芸術家のモデルになって、私が紹介する年配の重要人物の巨匠たちの前でその土地特有の美としてヌードになりポーズをとってくれませんか、そしてこの連中がもっている権利に身を任せませんか。ポッティチェッリやティントレットやヴェロネーゼやコレッジオ、特別な筆の使い手のマサッチョのようなホガース的絵描きたち、それに加えて13人のむさ苦しいなり目の並みのカメラマンたちに対して、と。そして純真な女の子たちを誘惑するためのパイロンの書いた詩がある。パークレー司教の哲学もある。ああ、今日の子供たちの無鉄砲さ。世界を股にかける多くの冷静な活動家たちも、屈強な狩人であるニムロデの様に腰の下のペニスに支配され、常に突き刺そうと躍起になっているのだ。背中での美しさ、裸体の神々しさ！卑猥なダニーボーイと一緒にかわいらしい少女たち！みんなくだらない奴ら！生気のない毒蛇の最悪の部分。目の前の老人を捨て、裏方で粋な色男とうまくつきあっていけ。接触せずに悪をすり抜け、教会の柱廊を君たちのゴールとせよ。革ジャケットやブルーネラなどは棚上げにして、努力の方向を変えよ！誘惑者の声が聞こえたら耳に栓をせよ。男の美の中に大蛇を見れば、君たちは最早イチゴの葉【高位貴族の位階を表す】を身につけることは決してないだろう。聖宝に頼れ。どのような男であれ、地上で絆を結んだ男とは、きっと天国でも結ばれているだろう。早起きをせよ、そうすれば世界は君たちのものだ。事前の女の子は夜のために身を飾っておけ。夢の世界への道

に行くにはポニーテールにしておけ。少しばかり覗き見て知っておけば、ぐっすり寝られる。詩を口ずさんでみれば、酒樽のような女の胴がペチコートを脱ぎ捨てるとき何が起こるか分かる。いいか、家禽商とともに床につき、ミルク配達人とともに起きるのだ。薄汚れた禿鷹の先頭集団がうろついている。そしてその呼び声が響き渡っている。タバコはタブーとせよ。リュージュは後ろの席に置いておけ。秘密の交際と匿名の手紙は、人に見られていなくともまさにその関与者を、その手紙と同じくらい悪しき存在にする。次に掲げるあまりにありふれた女々しい習癖に、どんなことがあっても興味を持ってはならない。[436] つまり門限があるのに、抱きしめの結びつき行為や、靴下留め打ちつけ行為や、愛玩ペットへの指先愛撫行為といった、ありふれた枝渡りの不道徳行為をしてみようと、破滅的人物、害虫、毒婦、ネズミとともに身をくねらせつつ、女の腐ったような大酒樽氏の玄関（こんなものくたばれ）でしばしば会って仲良くなり二人で抱き合うこと、である。こうしたことも、後々の人生に重大な影響を与える。足下に注意しろ、という訳だ。活力旺盛な多くの育ちの悪い女は、煙草も吸わない品行のよい夫がいても、自分の下品な振る舞いを全く意に介さない。3つの覚え書きを君たちに対して数え上げよう。一つ目。人をだましてはいけない！私がこう言うのだから是非そうしないでくれ！泥棒猫たちめ！そしてそれが男のどの仏をかすめ取る機会となるのだろうか。男をだますあばずれどもめ！なんということだ！いやはや、彼女たちが半ばだまされる姿はこ気味いい。市民ペグが密かに一言二言ほめめかしながら誘惑者トムにするように、病気になるよう度を越すことなく愛撫しキスしようとしたり、あからさまに声をかけたり、子供の娼婦のように誘惑的な言葉を口にしたりするあの女は捕まえ、鞭で打ち、火をつけ、燃やしてしまえ。言葉で戦う男がいるのだから、行動で愛する女がいるであろう。法律上の夫や、気品ある異性の親類が一緒にいるときには、できる限り好ましくない態度はとらずに、きちんとした態度をとって、奥に引っ込み休んでいるといった具合に、兄妹のように、普段のやり方で【相手の男を】愛せ。前に言ったように人を牛耳る愛ではなく、いいか、運河となった愛が、男に益をもたらすのだ。特に男がものぐさな生活をしている場合には。しかしながら、私はこの問題について（私は経験から学んだあと、インスピレーションで語っている）、つまり悪臭を放つ精神は純粋性を奪うということを、いくら熱心に論じたところで論じ尽くせるものではない。それゆえ、我が娘よ、20数個のチェリーの入ったウィスキーを一杯たりとも飲んではない。「猫とウサギ亭」で、あるいは「斑の犬亭」で。そしてロツツロード22番地。人は酔うと皆、お互いに対する尊敬の気持ちをなくしてしまう。フィズの悪臭や口達者なおしゃべりによって、ダブリンのだらしない酔っぱらいのズベ公であることが分かってしまう。いつも日曜日の朝に請求書ももらって、土曜日のひどい夜の飲み代を払

うことになる。そういう夜は五月の夜で、月が煌々と輝いている夜だ。君たちがヘルファイアクラブ【18世紀に貴族の若者たちによって作られた、放蕩、不道徳的行動を目的としたクラブ】を蔑ろにしようとしなければ、我々は天国で会うことはないだろう。丘の上でも穴の中でも、イングランドのハルでもオランダのハーグでも。キルデアでカクテルをあえて飲んでいるとき、あるいは同じように、通夜から馬車で帰ってくるときに、酔っぱらうことにも気をつけよ。灰かぶりの少女たちよ、男にいちやつくときには骨抜きにせよ。しかしながら彼のけなし文句は大目に見よ。君たちの貴婦人らしさを男の肩に投げかけよ。しかし彼が少しでも大胆になって、君たちの慎ましやかな希望を踏みじり、何ら警告に耳を傾けないのならその場を引き上げよ。しかし君たちが挑発行為をし、相手を興奮させようと考えたならば、燃え上がるほどに痛むまで君たちのお尻にむちをくれてやる。[437]目に貴婦人らしい愛を宿しながら、君たちの男を籠絡しようとするむき出しのたくらみを嘲笑ってやろう。あのまだら模様の自転車やサイクリングにふたをして、堅くねじでとめるのを怠ってはならない。平地での【自転車を使った】追突レースや、ある地点からある地点までの障害物レースも同様である。風の強い日にみだらかな姿でラットランドの坂を自転車で上り、ダブリンの街の中心部に着く前に、反抗的な北方人を刺激するのも同様である。気取って煙草のパイプをもち、ハンドル部にかかとを乗せて、英国式フリーホイールの自転車に乗ることも同様である。これはまさにポーア人的恥辱行為である！いや、コサージュで覆い隠すところの肋骨が軟骨化しないうちは、つまり、内蔵の脱出症になった場合のことだが、君たちの脆弱な腹壁の変調や、ワインによる肝臓の不活発さといった一時的不調は大目に見ろというのが私の言いたいことだ。あるいは手短かに言うと、いいかね、腎臓をきれいにしたり、十二指腸を動かしてそこに住まうギョウ虫を追い出したり、汗をどンドン流したりするために、健康的に体操をすることが必要であるように感じたならば、広間にいる読師を説いて、門番に門を開けさせ、泥土の道に出て飛び跳ねたらどうか。スポーツウーマンになれ。自然である重要な女性器を大切に扱い、月経が規則正しくなるようにしろ。君たちのブント【紅海南部の古代エジプト人の呼称】の香水は単に安売りで売っているものにすぎず、悪臭漂う病人のそばにいろようだ。香水は空気よりも重要だ——つまり食べることよりも——空気よりもね（おとっと、私は口に出してはいないが、私の話は食うことだらけだね）。また香水は自然に便通を促進してくれる。質の悪い卵は踏みつぶしてしまえ。「生物の快適な暮らしについての講演」で栄養士が言っているように、残念ながらきわめて数多くのプリンが我々に失望を与え、また残念なことにきわめて多くのスープは糞尿だ。ビートン夫人の料理書で我々が太ることができるのならば、我々はカバのように歯をもっていないであろう。しかしながら。同じように、もし

私が君たちならば、家具付きの部屋を借りていて、飯のための支払いの勘定を個人的な付き合いとピアノの調べで払っている下宿人には、目を上目遣いに開いて用心するであろう。君たちは自分を愚かに感じ、自分に腹を立てるだけだ！マズルカウィッチ——彼は女を引っ掛ける目的で古のパンノニアから来たり、男女関係のことで訴訟を起こされたり、音楽でくつろいだり、メロディーの巨匠マックシャイン・マックシェインの曲を非常に愛らしくピアノで奏でたりする奴なのだが——や他のろくでなしのような、あまりに馴れ馴れしい友達のような顔をした男たちは、何年間も君たちを支配し、君たちに破滅と苦悩をもたらすということがすぐに分かるだろう。ジョーンが家にいないとき、もし君たちが、女の性で、幼な恋専門の利己主義者の男と、[438]こっそり二人きりで閉じこもり、普段とは違う服を着て、愛人としての彼のひざの上でひなたぼっこをしたり、彼の口ひげをいじくりまわしたり、しっかりキスをしたり（悪趣味な行為で、これは君たちに分かるようなことではない）するのに慣れたらそういうことになる。こういう奴らは君たちにこっそり近寄り、胸元のレース飾りを乱し、先ず手始めに二つの大きな乳房を、そのあとに胴着を手で乱暴にいじくりまわす（気をつけてくれ、どうか【そういった場合には】考えをちょっとだけ変えて、こっそり私に言ってくれないか！）。そして君たちが親密になって、杭打ち遊びをする機会を彼らに与えたときにはいつでも、彼らは変態行為をし続ける。君たちのことに大きな関心を持ち、うろたえたように、君たちのきれいな首や、丸い地球や、白いミルクや、赤いラズベリー（何とあきれた奴だろう！）についてのたわごとを話し、さらに君たちの過去の生活に関して意味深長な質問をして、機会があったら腕づくにしようとしてチャンスがうかがっているのだ。そいつと一緒に歌ってどのような益があるというのか。次の向こう見ずな行動として、君たちは裸で浴槽の縁に腰かけ、年老いたグラッドストーンの栄光のために、また公平にスコットランド高地連隊のために、ブッシュ遊撃隊の覗き見専門の兵卒のために、壁を背景に写真に収まるかもしれない。そして我々の地元のおせっかいな人間やおしゃべり好きの人間の噂話的に、最後の審判の日までなるかもしれない。またまた最悪なことだ。熱心な祈り手から托鉢修道士にまで、彼らは話を行き渡らせてしまう。もし君たちが淑女にふさわしくない陶酔感を抱き、夫婦の間に割って入って、悪徳の悪臭漂う連中の中でも飛び抜けてひどい既婚者と直接の関係をもち、暗いランプの下で暮らす社会の寄生虫たちである売春婦たちと虫酸が走るような結びつきをもつようになって召喚状を受け、その結果第二級の犯罪の裁定を受けて困り果てた場合、ピーター・パラグラフやポーラス・パフのような（自分の懸念を覆い隠すために、私は彼らの名前を記念に取っておこう）、ジャーナリズムの共産主義系のコラムニストたちが、自分たちの目玉記事にしようとして君たちのことを把握し、君たちが一人にいるときに不意に襲ってく

るのは全く恐ろしいことだ。文明がゆっくりと進んでいるのに、平均生活水準以下の家庭内での悲惨な出来事や、標準体重以下の新生児の22,000人目の誕生が何と数千ポンドも始末の費用としてかかる、今日のこの石油時代の荒んだ結婚生活、1ポイントが3シリングもする経済状態による家庭の嗚咽、妻たちの混乱状態、これらのことを考えるとそう感じられるのだ。神への畏敬と愛のために、決してそのようなことをしてはならない。これからはいかなる気取った学生も(いいかい、私は愛にかかわる武器と、悪童から色白の娘までが経験するすべての愛の序章に通じている。それゆえ、幸運なダフや、快活なリンゼーや、傲慢なハミルトンや、陽気なゴードンなどの、夜這い野郎や売女好きといったごろつきどもの集まりが、薬やお医者ごっこをしたり、[439] さもなければスカートめくりや、気まぐれな奴らがしそうなことに手を出しているのを私が知っているのも、至極当然のことなのだ。そうしたことを深く心に留めておくように)、危険な年齢である君たちにとっての危険な領域には立ち入らせない。そういう目に遭いそうなきときには、私が君たちを捕まえてあげてあげる。気をつけろ、そういう目に遭うのは君たちなのだぞ。君たちを捕まえ、君たちの心の中に数匹の悪魔が住まっているかどうか自覚させてあげよう。情熱に満ちた、高貴な、重厚な、聖なる銃を、君たちが祈りの言葉を口にしないうちに与えよう！さもなければ、あのカルメン修道会の神父に対し、ルシファーの呪いがジンマシンのように降り掛かるように！この神父は戯言を口にし、飛び抜けて無邪気な乳母の心を変えさせたのだ。この乳母はムアのメロディーの悪口を言った吟遊詩人のあとを追いかけて、この愚かな雑誌執筆者を恋の虜にし、この恋にしとめられた者をフトモモの高木——この高木は、クーパー・ファニモアがかんなをかけて平板にしてビール樽を作ったもので、その樽の上の無知の席には、私の叔母がかわいがっている妹に対し、快楽の元として私の祖父が抱いた最も激しい欲望が座していた——から落ちるようにそそのかしたのだ。アーメン。

プーッ！いやはや、お前のことを考えるとため息が出てしまう。何度も何度も、すべては私の嘆息で満ち満ちている！大きな音を立てて！充満し長く続く！尊敬すべきヴァル・ヴズデン【ミュージックホールの芸人】がもっている雄々しい低音の声のようだ。私の喜びは干し草の上の露のように消えてしまわなければならない。お前が私の声に予期していたのは、甲高いいらだちの金切り声だったろう。どの人物だか知らないが、ブシコーの戯曲『ダディー・オード』の中の警告を聞かせてやろう。誰だったかな。私が考えているのは、誰の警告だったかということだ。なぜなら私に中庸の道を進ませ、穏やかに表現させようとする強い力が働いているからだ。私は淫乱の空気が辺り一面から沸き起こっているのを感じる。この悪魔じみた空気を押さえることができるのは、私が手にする大きなハンマーの力だけだ。このハンマーのみが、次に誰が何を語るのか知って

いるのだ。しかしながら。今から、オペラ歌手のような私の声が出るところよいことが起こる。さあ、いいか。親愛なる妹よ、私は完全なる愛をもって再び言う、兄としての忠告を受け取ってくれ、そして私、ファーストネームがジョーンである私が、お前が避難すべきところをここに今からただで作ってやるということ銘記してくれ。親愛なるイシーよ、たとえ男たちが、お前の心をうずかせるようなことを言っても、何も言わずにいるか、あるいはノーと言え。ぺちやぺちやしやべる奴とも、お前の最近の恋人とも、お前のことを欲望解消の妙薬と数えている、段ボールのような説教壇に立つ神父とも頼ずりをしてはいけない。お前に黒を白と信じ込ませるような煮え切らない奴には気をつけろ。体の衛生のためにも閉じこもっている。しかし無知な馬券買いには近寄るな。お前を悲しませる本は燃やし、どれもこれも、トム・プライファイア【フィン神父著の『トム・プライファイア』の主人公】やサボナローウを窒息死させるような様々なかかり火にしてやる。そのような本ではなく、出版物の王とされている真の機関誌『ウィークリー・スタンダード』を熟読せよ。[440] 心の5機能【記憶力、常識、想像力、空想力、判断力】をごく最近の4冊の出版物に使い。アースディケンの『奇跡に関する論考、あるいは探求者としての司祭による死についての考察』はアイルランド政庁の発禁にもかかわらず、この分野では未だ第1級の本だ。ウィリアム・アーチャーのローマカトリック教徒のための優れた文献目録。彼はお前を国立図書館に通ずる道へと向かわせるであろう。信心深いコミック作家デンティ・アリゲイターの書いた『教皇たち(ほとんど男子だが)とともに地獄を通して』に目を通せ(お前の禁書から除外して)。そして略標題から、そのきわめて滑稽な物語世界の中に込められたジョンソン神父に対する警句を探し出せ。声に出して誓うときには、次の敬虔な小説にかけて誓え。すなわち、カーニヴァル・カレンの『ヒラマメ学』、S.J. フィンズの『パーシー・ウィンズ』、あの戦争の収め手による『豊かな平和』である。これらは最も個性的な高位聖職者、アイルランドの大僧正であるリンゼン師およびプティボア師によって出版が許され検閲されたものであり、条件付きで販売拡張が認められたのだ。このうち2冊は父親のジルが出版を計画し、息子のジルが発行し、聖霊である神のおかげで十進法単位で売れ、この幸運なる年に市場でベストセラーとなった。私の教義を広めるために、挨拶する程度の知り合いでも、年上のトロット老夫人、年下のマノエル・キャンター老夫人、そして最高の詩人であるロバー・ド・フィガスの各作品を彼らに読ませて感銘を与えよ。昔私は筋立てが目まぐるしく展開するメアリー・リドルラムの物語の内容が理解できた。特にセンチメンタルな味付けがしてある話は。選りすぐりの科学書はお前の心に益となろう。『過去の雄鶏が産んだ卵』や『フラジェット【縦笛の一種】による空想世界への移送』などである。主に少女たちのためになる。聖餐用のティーを飲みながら、こ

うした書物の様々な人間や事象の描写に接して、我々の聖人および聖職者の長い人生の中に入って見よ。近道をするのなら、お前の思考の改善のために、権威ある人々が書いた教育の入門書を読み。麻痺した人のことを忘れてはいけない。哀れな老いた黒人奴隷コントラボーリーのためにろうそくを灯せ。統合失調症の患者には金銭を渡せ。まさかのときに頭を使うことこそ、そう、友情に満ちた行為なのだ。いいか、お前が塵であり埃であることを覚えておけ、しかしながらお前はシンデレラになるに違いないのだ(ルビー、何のためにお前は彼女の袖を擦っているのだ、ポリー、私語を慎め!)。みんな、このことを10回反芻せよ。約束違反を許さない男子も、仕立て屋をもめかし立てる少女を持ち上げるものだ。そのようなことが欠如しているのに、お前は声をたててよく笑えるものだな。前よりもはるかに進歩したお前のさわやかな純潔さをそのままにしておけ。私の家族——それをお前は心から大事にしており、またそこでは最も嘆かわしい両極端の性格の者たちが一緒になっている——からまさに私の元に出て来たエメラルド色の【目をした?】何よりも大切なこの純潔の乙女と別れるくらいなら、全世界の奴らにばか騒ぎを起こさせ、女たちに何でも好きなことをやらせてやった方がいい。[441] 真の結婚を知らせる銅鑼が鳴るとき、肌を見せるような服は脱ぎ基本服を着よ。女よ、自制せよ! というのも、女という種族は、はしゃぎ回り、飛び跳ねる者の中でも最も向こう見ずで、飛び抜けてせっかちな者になるからだ。墮天使セイタンに属する黒、緑、灰色の服は引き降ろし、天使長ミカエルに属する白やおがくず色の服を掲げよ。下着を着ているのなら、何を着飾ろうというのか。白が希望を生み出しているところでは、法皇も見捨てることはない。静かに聞け! ディナーを食べずに歩いた彼女に祝福あれ。というのもそうしたおかげで彼女の食欲がわいたからだ。先に進め! 両親など世話をしなければならぬ人がいても、好むなら肉の脂肪を食べていいし、子牛肉のシチューも好きなように食べてよい。老年で退職した夫に食べ物を与えようとメフィストフェレス的唇を突き出していたとき、キャサリン伯爵婦人の身に常に起ったことがこれだったのだ。それゆえこのことは彼女の名前と結びついている。ラ・ドリーピングとか。ディー・ドルーピング【ドリッピング(dripping)には、脂汁の意味がある】とか! 必然の運命を追い求めた他に類を見ない例だ! 彼女の食べたいと思ったのが単に一口のソーセージでないならば、何よりもこのことが真実を言い当てていると私は聞いている。なぜなら彼女の願望は、彼女の目に入ったバラのマリネや軽食クランチにあるからだ。それゆえペンをとったのなら、パイに私の名前を書いておく方がいい。イシー、希少で豊穡なその宝石を守れと男は言う。この寒々しい古ぼけた世界において、誰がそのようなことを感じるだろうか。フン! お前たちが皆大騒ぎするあの宝石は、男たちのほとんどが手にしていない。というのも、それに匹敵するのは、黒テンの肩がけ

か小型の自動車だけだからだ。奴には指輪を礼賛する歌でも歌ってやれ。私の下の部分に触れよ。そしたらお前に欲情を覚えるだろう、私の誰かさんよ。見せる、そして見せる。派手に見せる。彼女は。靴を履き。輝いていた。

明らかにしろ、と勤勉なジョーンは、悪態をつきながらオルガン演奏台を蹴飛ばし、バラムのロバがいなくなきように突然大声でわめき叫んだ。そしてその人間の声を大きくふくれあがらせながら、両手を握りしめ、男である彼は極度に緊張し、次第にかなり熱くなりながら彼女に警告した(就寝時に薄い粥を詰め込んだはらわたでは、動力が働いていたに違いない)、どんな奴であれ、路上でお前をぶらついている女と受け取って話しかけ、ああ!(そのいけ好かないセックスアピールを効かした、滅茶苦茶な豚面野郎め!)、酒や飯にありつこうと、あえてお前の周りにいる者たちとふざけ回るチビの舌なめずりの犬ころ野郎やデカの悪賢い雑種犬野郎のことを俺に明かせ、名前も住所もだ(そいつらのことで面倒なことになったら、奴の外見を忘れることもないだろう)、[442] こいつはうさんくさい、どこの馬の骨とも分からぬ、我々の国家の敵であり、妙齢の不倫相手から、見た目にきれいな明かりの中でも、固有の合い言葉を引き出すこともなく、結婚しようとしても手持ち無沙汰でいる奴なのだ。金銭的に窮地に陥っている、懺悔の言葉も口にしないこの無価値な豚野郎が誰であろうと私は一向に気にしない(たとえこの男が「すごいぞ、物知り」という私自身の名前と同じ名前を絶えずもっている者であってさえ。また私の祖先である二人の町の上役のような人物であっても。この二人のうち一方はヨークで市長を務めた親愛なるアングル・レムスで、他方はウォルバーハンプトンに住む、痩せこけた陛下、ユリッサボン・ニッカボッカ老神父である。この二人はスプークベリの巡回裁判で彼らの離婚問題を持ち出し、彼らにとって苛立たしいことを話し合っている)。しかし、二本道のピーターバラの街に、利害のための司法権管区があるのと同じくらい実際に、また聖ブレンダンのマントがヘイ・ブラジル島付近の海を白くし、彼が進む際に踏む小石が我々の足下に踏み段を紡ぎ出し火と剣をもたらすなか、西の約束不履行の地【アメリカ】から波が予定通りの時刻にこの国に到来するのを(もし私がその波より少しでも早くやって来るなら、私は立ち去る時間よりも前にちゃんと戻っていることであろう) 見込めるようになるのと同じくらい確実に、まさに妹の名前を重視しているがゆえに、できるだけ迅速に、非力ながらも妹の監視役になるのでどうぞ安心してくれ。奴はその時から目をつけられる。なぜそのようなことを言うのかと、お前は問うかも知れない。問うだろう? 考えてもみろ! 思い当たらないか。考えて、考えて、考えよ、どうだ。違うね! 間違った答だ。お前は無知だな! なぜならおそらく私はそいつに、手取り早いやり方がどのようなものだからすぐさま見せてやるつもりだからだ。奴がプレーボーイの芳香を漂わせ、アラビーの歌をお前に歌い、縦と横を計って結婚

指輪の寸法を探ろうとする前に、機会を捉えて私が監督しているお前の処女性を聖所に引き入れようとしたということで、がむしゃらに奴の外側の面をひんむいてやることを奴に分からせてやる。いいか、もし私がラッパ銃兵なら、私は奴に決闘を申し込んでやる。今からお前に、償う代わりに私が絶対にやってやることを教えてやる。ラインスターの兵隊たちに対してレアリー王が立ち向かったように、私は奴の口を引き裂いてやる。奴の顔をパルプのようにしてやる。静かにドアを開ける、誰かがお前を欲しがっている。浮気女め、お前は真つ暗な夜のイスラム寺院における祝福の言葉のように、奴がお前を呼ぶのを耳にするだろう。さあ、来い、郵便ポストのように血で染めてやる！お前に手紙を書いてきた奴を不随にしてやる、信頼できない女め！グランドオペラのスケールでそうしてやる。豚のような探偵とか秘密警察を使って、セント・パトリック・クロースのあたりのリパティエーのあさましい奴らを探り、悪漢どもを弁護士のような監視人の下に置くことまでしなければいけない。[443] 私は徹底的に監視する。奴の姿を、一定数私は網膜に焼きつけてある。愚か者のマイクの姿を。気を引き締めよ！さらにそのあと、国土防衛法に基づいた現在活動している IRB の軍に属する、私がたまたま最初に出会うかも知れないなりたての警官に、この売春宿の店長を引き渡すことを私が考えていないと考えるのなら、私に対する無礼な誤解だ。実際また、参考までに言うが、私が怖じけづいた場合には、怒り狂ってはいても、穏やかなやり方として、私が次のことを行動計画の中にさえ入れないだろうと、お前は考えてはならない。即ち、私が下級判事と 12 人の善良で陽気な陪審員たちの前で、このプレーボーイに対する裁判手続きを出す一方で、この幸せな気分にいるお前の完全なよそ者に、無分別にも襲いかかって、一発食らわせ、このクロムウェル派の奴を路上から片づけるということだ。よくても悪くても誰とも分からぬ親の息子。こうしたことをすることは多少なりとも重要なことであり、私にとって名誉なことになるはずだ。奴は奴の考え次第では、助けてくれと吠えながら、包帯を巻くはめになる。きっと奴の罪を何度も吠えさせて、かなりのパンチを食らわせてやる。ダブリン人は奴には勝利するのだ。その場合最後まで完全にやっつけるようなことはしない。お前を愛しているので、お前のためにお前のチャーリーを半殺しにして、予約時間前にアルジェリア人のあの外科医のところへ運び込むまでは。特に奴が次のような人間だと分った場合そうするつもりだ。茶色の服を着て町のあちこちを歩き回る男、ロルフ・ゲインジャー【ノルマンディー公爵、アイルランドの征服者の祖先】のような人物、欲の皮の突っ張ったアーノツデパートの売り場主任、56 件以上かその程度の数の他人の案を自分のものにして、体の格好は猿のよう、身長はおそらく 5 フィート 8 インチくらい、普通の YMCA のメンバーのタイプでタルボット家出のローマカトリック教徒、飲むものはクラレット【フランスの赤ワイン】だけ、

ずっと昔からの家系をもっていない、歯ブラシのような口髭、義歯、つまり歯をむき出してにやっと笑う、もちろん頬髭はない、霜降り柄のスーツを着る、水夫が着るだぶだぶのズボン、明らかに彼にとって大きすぎる、横が歪んでいる靴を履く、洗濯しようとしているネクタイを結ぶ、橋の形をしたマッシュ神父のネクタイピンをつける、ロス亭でバーのストールに座り、オールド・スタウト用のキドニーという酒の友を食べながら、禁酒用飲み物をちびちび飲む、新たに借りた家に置いておくための小間物を毎週いつも買おうとする、ホルダーにタバコを入れておく、ギネス社で高い地位にあり恩給もいい、ノルマンディースタイルの会話への旅に出かけないか、ミカエルと彼の失われた天使たちについての、メトロポール・シネマの特徴であるカラー映画はすばらしいという話を時々聞く。少し濁りのある青緑色の目をしており、その目は神が言及された際にはらわたが煮えくり返る様子を少しの間ずっと示している、[444] アルコールなどに安らぎを求める、列車がもつ突進性をもち、咳をすると生臭く、時々うずくような吃りになるといった一般的総括的性質を示す、10 年間で向上した彼の愛する二流の家族をもっている、つまり、裸足であれ、粗末な靴を履いているのであれ、どちらにしても、ものを蹴飛ばし出で行ってしまうような家族だ。

だから拳や肘を使ってでも私はお前を諫める。男遊びは無類に面白いかもしれないが、マリーがシルのセックスゲームをやめさせたのも、常にすばやく打撃を加えたからだ。武器が回り一面壁に向かって並べられてある。ああ、打ち捨てられた者の転落を防ぐために、だまされた者の困窮を防ぐために。そして誤った妊娠がないようにそうしているのだ、ミス・考え違いよ。あの汚らわしい老いた乞食が棺桶の中でしゃべるであろう文句を、このめかしこみ芳香を漂わした男は、彼の寝床の中で語る。その時はお前にとって危機が高まる時だ（その日後悔する者は、後悔しない者一人に対し 333 人だ）、私が言ったように、お前はすぐぶっ放せるように、銃身を真っ直ぐにして置いておいた方がいい（ジプシーの目をした小娘のお前、お前は私の願い事を聴いているのか）。さもなければ、誰が最初に襲ったのか、誰が背後から襲ったのか、わざわざ頭を悩ませて突き止めるようなことはせず、私の名前とお前自身とお前の赤ん坊のような【純粹な】生き方を貶め、多大な犠牲を払わせて私を打ちのめしたということで、あの通勤客が言っていたように、全面的にこの私がおまえを思い通りにする。お前に言い寄る、黒人の汚物（安売り用だ！）のように安っぽい、三文の値打ちもない厄介者を私は小槌で殴りつけてやる。さもなければ、お前のフルーツの味のする、ナツメのゼリーのような唇を、お前のためを思って思いきりひっぱたく。もしお前がお前の鳩小屋のような家で丁寧な言葉遣いをしなければ、お前のためを思って思いきりひっぱたく。愛の喜びは続くがつかの間に過ぎない。しかし人生における誓約は人生よりも長く続く。私はそのことをお前の

頭に叩き込んでやる。もしお前のフロックに馬の毛があったら、もしお前のパーバリのコートの中が、もみがかんなくずですっかり覆われていたなら、お前の監視役として、返報として、自称しゃれ男を引っ掛けることは悪行であるとお前に教えてやる。お前はローズマリー小路やポータナスティー街にいたであろう。いいか、私はお前を見張っているのだ。誰であれ他の奴に荷物をもってくれるよう頼んでいるお前を、本当の名声を夢見ているお前を。お前は決して棟梁のラルフとデートすることはない。お前は礼拝をさぼったな。特定のホテルで粋な都会の男とデートをしたな。イゾルデ、お前は一人で母親の相手をしに行っただ。お前は何人かの友達と一緒にいたな。どうだ、奇妙な話ではないか。そういうときには私に気をつけろよ！リムリックにパラチネットという場所があるのと同じくらい確かに、女狼よ、私はお前を罰してやる。[445] 極秘事項だがその方法を示してやる。この花形スターとやらにムチをくわえてやるのだ！お前たち二人が線路上を歩いていたら、用心しておけよ、私は藪に隠れて一撃をくわえてやるからな。注意しておけよ！切り裂いてやる！お前のせいだからな。敏捷な獵犬となって、急いで後ろの垣根に隠れてやる。へし折ってやる！お前のランプの笠を切り裂き、お前に言い寄ってきた奴らを押入れに閉じ込めてやる。きっとそうする。そしてお前の絹のような肌を切って、ガーターにつめ込んでやる。本当に痛い目に遭わせてやれば、お前は兄妹にあらざる振る舞いをやめるだろう。こうやってお前の身体を打ち、お前の心に接吻するのだ！お前がロデオで乗りこなす牛のような女なら、お前のおがままし放題なところを直すために、私は完全に納得して僧正の役割を演じるだろう。色白の男と悪しき誘いから守るために。サテンを着たルリハコベ娘よ、お前の進むべき道を誤らせる幾多の禁じられた悦楽があるのだ。いいか、お前自身のためなのだ、女に対して手を挙げる男は親切めかしたことをしているからだ。次の機会までにもっとしっかりと、「愛はイブを支配する」というモットーを覚えておくように。というのも、いいか、お前が皆と同じように私のことを全くの愚か者と思っているのなら、私はまさに喜び勇んで、裂け目が入るほどに尻に打擲をくわえてやるからだ。そうすれば、お前のボタン色の尻にオレンジがかかった恥辱の赤みができ、ついには「助けて」と喚き、熱と赤みと苦痛を与える打擲に対して、怒りで顔を紅潮させるだろう。この私が、私はやる、私は苦しむ（このおべっか者、お前は私の言っていることが耳に入っているのか。それにお前のスレート色のリボンのちょう結びを見るのをやめろ）、そしてその尻の赤みは次の年になっても、ほぼ一年中消えることはなく、お前はいいところを見せることもできない。明かりを消し（吹き消せ！）、ぐっすり寝る。このようにして私はお前のために、お前の欲望に満ちた美貌を閉じ込めるつもりだ、嘘つき娘め。というのも私こそが、厳しい打擲を行う二本の腕をもっているからだ。その二本のうちのど

ちらかだ。

お前に知られずに私は海を越えて戻ってくるつもりだ。教皇の大使としてここに戻ってくるつもりだ。私の許嫁よ、最も深い愛と最も深い内省を伴う思い出をもって、(崇高な事柄から愚かしい事柄まで) 私は何度お前のことを想うことだろうか。しかし私は虚無の中で進んで自分の評判を汚しつつ、ドアを二度ノックする者の騒がしい物音【借金取りが立てる音？】に悩みながら、海のはるかかなたにいる。西部に住むリンダに宛てて詩を書いた、ホメロスのように偉大な詩人フレッド・ウェザリは、この気持ちをどこかで私よりもかなりうまく表現している。おそらくそれは『踏み越し段に腰をおろし、私はあなたを助け切り抜けさせた』であろう。リフィー川の土手から小さな痛々しい光が差している(私の行動を邪魔するために!)。しかしお前は、我々の愛情が純粋な形で住っている私の心の中で、大きな一角を占めている。エアウィッカーと私は血のつながりがあるがゆえに、我々にはアブラハムの息子たちのように、[446] 絶えまなく子供ができるかもしれない。ああ、至福の気分だ！請け合って言う！私を軽んじるお前のやり方は徹底していた。だから私は誇りをもって、結婚式の日の夜に登場する、非常に可愛い、茶目っ気のある子供の神ヒュメーンの手を借りて、私がお前の中に飛び込んで行くことについての最もすばらしい考え方をお前に教えてやる。もし私がいかに名誉ある人物であるかをお前に納得するまで分からせたなら、お願いがある、頼むから、どうかお前の部屋着姿を私に見せてくれないか。私は生き延びる、生き延びなければならぬのだ。私のさまよう手をお前の手に熱烈な気持ちで再び置きつつ、私はそうなることを、私の心とお前の心を結ぶ神に、是非にと願いながら生きている。そしてお前の作る見目よいプラムケーキのような二つの純粋な色合いの頬を、砂糖のような甘いキスで覆うことも心から願っている。そうなることをずっと長い間願うがゆえに、私はお前に言い寄るコウモリたちに対し、ある粘ついた空気の朝、吠える犬をけしかけ、打擲用の櫂の木の杖を使って、本気になって鐘楼から脅し追いつけてやる。私はそうなるし、やるし、やろうとしている。この二つの合わさる川が交わり、願いと願う者の関係のように、もはや分裂することのないどっしりした山のごとくなるや否や、お前はすぐさま、私とお前が柔らかに一体化する幸福なときに、肩や腕に唇の形を完全に残そうと、雨のようなキスを私に返すのだ。そしてお前と一体化した状態で、私は野生の狐となって、再び私一人で世間知らずの奴らの中に入り込み(冷酷に！乱暴に!)、甘い思いを享受した似たり寄ったりの気取り屋たちをやっつけてやる。そしてついに奴らは、今度サクランボがアイルランドに戻ってくる時には——サクランボは今戻ってくるに違いないし、過去に戻ってきたに違いないし、目前に迫った時節においても戻ってくるに違いない。今後私が国王と王妃の土地【オファリー県とレイシュ県】であるシュア川とノア川の流域を通り、お前には分か

らないように、元気な少女たちが飾るための何本かの紐につながっている真珠を携え、馬のいない競馬場のパドックにやってきて、無知と至福の状態につつがなく戻ったあと、直ぐに戻ってくるに違いないのだ——我々が互いにそばにいる恋人どうしのカッコーであると確信するであろう。どうだね。

華奢な君たちよ、私と野良猫の集団とともにスラムに行こう。娘たちよ、スラムをきれいにしたあと、労働と社会奉仕に乗り出し、孤児を引き取って我々のアベライト連合【アベライトは孤児を養子にした4世紀のキリスト教徒】を完全なものにしよう。心地よい調べに向かって進みゆけ！マフィーやヘンソンやオドワイアー等活動資金の番人たちよ、立て！君たちが自身の任務を完遂してくれば、短い時間ですむ。簡素な服を着て、互いに抱き合い、互いに肩と肩を寄せあえば、仕事の計画をうまくやってのけよう。普通のギルドに入れ、しかし全くの無名の人間とはなるな。ダブリンを文明化しよう。真なる我々は準備段階として使徒のように皆一致団結し、[447]人の役に立っている人たちを援助し、トイレ掃除の修道女たちが豚の巣穴のようなトイレを掃除するのを助けよう。そして万事に活気を与えよう。当たり券の入ったレシートを出したり、総賭け勝負【参加者全員が賞金を出し合って、総掛け金が一人、あるいは数人の勝者に与えられる勝負】の賞金を徹底的な分配制度にするなど、大規模な社会改良を行おう。そうすればついには、ハブもスポークも輪縁も、すなわち、あらゆる人々が賛美歌を歌うように鼻歌を歌うようになる。アイルランド的なもののみ焼却し、彼らイギリス人の石炭を受け入れよ。イギリスの大量の黒いコークスに満足し、アメリカの鉄鉞に触れよ。プロの学者たちよ、アンリエッタ・ルナン【弟エルネスト・ルナンの『イエスの生涯』の執筆の手助けをした】のために、陪審員の死亡率、最も性能がよい時の水洗トイレの沈殿物について、全体的に過去を遡り直観を働かせながら、ただ大雑把でよいのでレポートを私のために書いてくれないか、ここに陽気で若いウォーターマン【万年筆のこと】さえいれば私一人で全部それを書くのだが。いいか、ヘンリー通り、ムア通り、アール通り、タルボット通りで、住民が落としたバナナの皮や半熟のタマゴが渴き切ったゴミの祝典となっていることに心を配ってくれ。司祭や市長や国王や商人、果てはウェールズの第一王子までが、鳥の餌を作り出すために行ったすべての人間的なマナーの悪さを見てくれ。彼らはキャッスル通りにものをまき散らし、肥料をぶちまけたのだ。そして11人のマリスタ会士修道士たちとカルメル会修道士たちが相対しながら、祈祷という男たちだけのパーティーを開いたボールズブリッジ・ホースショーからダンフィーズ・コーナーに至るまでの区域においても同様の惨状だった。彼らカプチン修道会修道士の信者を、ダブリンの北東にある、おがくずに覆われた湿地帯であり、皆が行状を大目に見る小悪魔の住む、俗世間的フェアビューのゲップ橋付近の人々

と比べてみよ。一般市民とはどういうものを意味するのか。君たちは異端についてどう思うのか。ピアス・イーガン【18、19世紀の英国の作家】の描いたゴミ箱のようなダブリンでの生活と、フィーノ・ラッリ【B・A・ラッリはトリエステの高級官僚。ジョイスの弟子】が記したバークリーの哲学の大綱とを対比してみよ。アジアになぜこれほど宗教団体が多いのか説明してみよ。いかなる数にもまして、何ゆえこれほどの宗教団体の数なのか！どの宗教団体であれ、信徒の数は何故これほどなのか。現在はどうか。スペインの聖職者がいない最も緑豊かな島はどこにあるというのか。これが一般的になっている。私は困惑しており、いらだちが頂点に達している。ああ、どうか！途を、フォード車の走る混乱した我々の街が自己を整える途を教えたまえ！古い自転車に心からの親しげな挨拶を送ろう。あるいは自分でこの事実を確かめるために、傘をさし、安らかな心でドラムコンドラ行きのトラムに乗り、そして高位聖職者が勤める聖職者にあつた半袖シャツや胸衣前飾りを身につけ、歩いて小道をたどり、例えば強く勤めるが、アストン・キーで、自分で手に入れた「種と雑草法」についての本を一冊もちながら立ってみよ。[448]そしてそのとき適当に選んだ、例えば、ケインとかキーオのような11番地の店のウインドーを相当長い間覗き込んでいよ。そして32分くらい経ったら、踵を返し元の道を引き返そうとせよ。実際もしそうしている間に、クロス・アンド・ブラックウォールズ社が製造する柔らかいジャムの運搬車の通過によって、どんなにひどく泥の跳ねを浴びせかけられるのか知って君たちが驚きもしないのなら、私は完全に間違っていたことになる。カベル通りを見てから立ち去れ。ここにいる人々が不平を書き連ねたノートを私に見せよ。スキャンダルをかき回るキャサリン伯爵夫人はどこにいるのか。街の中でも破壊されたトロイ的な街であり、都市の中でも放縦なカルメン的都市であり、また穴だらけの服を着てうろついている乞食たちが群れをなす、我々がこよなく愛するダブリンの醜悪さは、いつになったらリバプールやマンチェスターのように十分洗濯された白い服を着られるのか。妊婦用の吐剤や活力を失った男性を乗せる担架を備えた、国立の、金杯を授けられる、混雑した大病院がいつになったらできるのか。私は言論の自由で全く賛成であるが、誰が法王の住んでいたアヴィニョンをけなすのだろうか、また誰が阿片通りを根こそぎにするというのか。誰がプレイヤホース岬を明るくし、誰がブル島やベイリーに魅力を与えるというのか、誰がルーカンを絶望視せずにいるのか。手に負えないこの国の監督官たちめ！誰にも不利益しかもたらさない風は吹かないものだ。こういう仕事は私こそ雇う価値がある。報酬として油を、食事のために労苦を、失業に対しては、首をくくるための縄を携えた散歩を。慈善が望めなければ、何の益が私にあるというのか。何もない！舗装道路のための私の工具は、苦難に至るドアのノブだ。というのも、これは、『狐物語』に書かれてある話なのだが、

女の子の父親がドアをしっかりと閉めて、狼を寄せつけまいとすることだからだ。幼き娘たちよ、これがどんなことだか分かっているのか。その頃私は、今は大イビキをかいている、微笑みを浮かべたある選挙の投票依頼者から、これから先いついつまでも、【道が悪いので】ハイキングは自ら進んでやめておくよう忠告された。自動車やこの衰れた足を守ってくれる履物やバーデンの温泉地で療養するためのどこかからの資金（資金といっても、今度どこから出るのだろうか——正直なところ、この資金に対する所得税がこれなら払えると思うくらいの金額であればよいと、当然のことながら思う——が増加する状況の密やかに生じる時までぜひともそうすべきだと、彼は言うのだ。アーメン。

最愛の妹よ、ジョーンは自分の背中に敬意を払って背を彼女に向け、帳面を開いて考えと現状を伝えようとしながら、いくぶん暗く、しかしいまだいくぶん勿体ぶった声で付け加えた。[449]今回彼は微妙に詮索的で憂鬱そうであった。そしてまた彼は訝し気に天空に向けて口を開き、星のようにキラキラ光る魅力的なその落ち着いた目で、想像上のつばめを素早く追っていた。ああ、空の空なるかな！すべては終わり消えつつある！神のおかげで、個人的には私はそれほど急いではいない。時間をたっぷりとったためにカモを失ったとしても、気ままに歩いてそれを見つけ出したのだ。駆けているにせよ、歩んでいるにせよ、鹿の通る道をカモすべてが地上の光のようにあつという間に通り過ぎ去るのを瞬きしながら見るのは、悲しみとともに極度の恐怖をも感じる。しかし私は、私の心をとらえた活発な少女、多柱式の塔のように崇高な真なる娘、我がライアンの淑女を大切に扱う。彼女がつつがない行動をとり、その天文学の知識を活かして私の道案内役になってもらえるなら、それだけで喜んで私は戻ってくることにする。これが今まで以上に私のとるべき方針となる。今の居場所に留まること以上のいかなる運命も私は求めない。褐色のティーを少量飲み、傘の僕であり石を投げられた聖ジョナス・ハンウェイ【ロンドンで傘を持ち歩いた最初の人。石を投げられたという。また紅茶に反対した。】に庇護を祈願し、肘に体を寄りかからせ、香炉持ち用に切っただけあるヤコブのパイプ【陶製の頭をもったパイプ】をふかし、心からの友人であるピーター・ロシュ【アイルランドの国会議員】とともに留まるのだ。過ぎ去りつつある今、雉子などの鳥たちが私を留めるこの場所近くに居住することを私は夢見るであろう。ウサギが私の足ほどに長い耳を立てて立ち、小さな赤い犬、いや狐だった！が、臆病者のウサギの姿を見て追いかけて、息づく夜の奥へと消えてしまう、鳥たちに囲まれ——ツグミやカラスが私のため息のあとすぐ続けて鳴いている——、生け垣から赤や黄色や青の宝石をつまんだり、揺れる指先で輝く蛍を捕らえたりしながら居住することを。しかしあの古い時計が（早くそれを止めてくれ！）まさにその時間を指し、あの渴望に熱した微風がドラムサラのあたりに吹き、悪魔となって女たちに言い寄るのはご免

である。聖なる雷鳥が吠えたける時まで、また丘が隆起する時まで、ヤマカズラが鳴いている間、一面を照らし出す雷光を見て平然と笑いながら、私はここにゆったりと腰をおろしていたい。そしてずっと先のドラムのような狙撃音【雷鳴】のほうに夢見心地で耳を傾け、懐かしい昔からの大気がかもし出す、無線で流れてくるハーブの音と、郵便列車（そっと見てみろ！そっと見てみろ！）が夜の川を渡る音と、川を愛する者らしい穏やかな、森の中（荒野の公園だ！荒野の公園だ！）のヨタカの鳴き声と、カエルの冴えた冗談とを、サケのために茶の葉を残しながら、陶器愛好家のためにベリック【アイルランド産の陶器】を残しながら、耳にしていたいのだ。そして遂には、ラグビーのボールのような月が、スクラムを組んだ雲の間を、眠りにつこうと西の方へと嵩を増しながら転がり進んでいくのを、野原で測雲器を通し目で追い、[450]私の夜のガチョウの母親が、東の空で私のために新しい金色の卵【日の出】を産んでくれるのを細心の注意を払って見守るのだ。私が手にすることのできないどんなものがあるというのか——川岸の貸家もカワウソの毛皮でできた靴も祈禱書も、正直手にすることができる！——。そうなのだ、そして私はおかしな奴も出現する昼間のトビウオの祝宴にそなえてベルトを緩めておこう。おかしな奴とは、ヒメハヤに混ざっているあの楽しそうなグッピーだ。彼らは白鳥の通る道をきらめきながら進み、また動きのすばやいウナギや大きなニジマスの赤い連中や半盲目のコイの前ではね、私の後ろで風変わりな形の釣り竿を持ち上げたりする。こういうとき私はなによりも、蜜柑と梨の力を借りて一人堰のそばに横たわっていたい。他人に気兼ねなくただ一人で、貝のホルダーに入れたマッチでパイプに火をつけふかしていたい。私の鼻孔にとって好ましいラタキア【人気のあるシシリー島の煙草】が吸いたい。そのジャスミンの香りは薄くなってはいても、皆が満足するまでには残っている。そして木々の王は、私がびっくりするほどに素朴な香りを放ち、グリフィン川に餌を落とし、星の光のなかで川面を燃やし、クランペット【パンの一種】やパイを焼くために、イギリス王宮御用達のチョウザメ【ウナギ】というトロフィーを腕一杯にとらえるのだ。ああ、夜になって、アドレイド通りのすべてのナイチンゲールが、ひばりの塔の木陰で私に向かって鳴き、私にまわりついている間、私は29羽のドリア旋法で歌う黒鳥たちにちょっとした歌を歌い、様々な変奏法で木管楽器を使ってメロディーを奏でるための神秘的に満ちた音楽的知識を授けよう。ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。そしてついには、この小さな森全体にこの音階がこだました。でもこれはすばらしいことではないか。ド、ミ、ソ、ド！私はピアノの箇所と同様フォルテの箇所も気にせず歌うであろう。しかしながら調性はずすことは決してない。私の声は軽快で正しい調子にぴったり合っている。マリオ【実在のテノール歌手】の声ではない！フラットの箇所でもシャープの箇所でも！というのも、私はズボ

ンの裾までマコーマック【実在のテノール歌手】の声を誇示しているからだ。そして私が掲げるこの歌手は（ああ、ラ、ラ、と鼻歌がでてくる）、音叉に対して声音が正しい音程にあるばかりか、カラフルな音素をもっている。当然君たちは私の声を調子はずれだと低く見るかもしれないが、私のみがキラニーの子守唄を歌うことができるのだ。単調な曲だからね。しかし、いいか君たち、世間には気をつけなければいけない！ハリエニシダにとって好ましいものも、庭にとっては苦痛の種となる。ローガンベリー【木いちごの一種】には密かに死が潜んでいる。キングサリ【毒植物】を避けよ。派手なテングダケは始末せよ。毒イチゴよ、ああ毒イチゴよ、汝の名は美しき女なり！しかし虚言に満ちたうわさ話にはうんざりだ。仕事は仕事だ。君たちの仕事は仕えることだが、私の仕事は戦うことだ。さあ、私の言うことにはちゃんと従え。優れた私でも、何よりもすべての試練を経ることになる。いや実に、ラ・トゥシュ銀行にある金のような大金になりうる硬貨に私はとりつかれることになる。[451] すべてのなげなしの金、全財産を、最も妥当な費用をかけて、裏の世界の違法なウイスキーへの投資にまわそうと思う。お前がこっそりもっているすべての金とは対照的な、たまたま見つけた古いコート（madamの複数形よりもmadamの単数形のほうが、数が多いとするならば【こうしたことは決して起こらないことだが、の意味】、神がイギリスを罰して下さいますように！）を賭けて、猫にしっぽがあるのと同じくらい確実に、レジスターのなかに入る金のようにどんどん金を儲けるやり手の投資家になると私は明言する。そしてまた一人が得をし、十数人が損をすることで、野生のプラムの種をまいて、多量のエルボール【プラムのワイン】や蜂蜜水や蜂蜜入りビールといった豊穡の角に実らせ、時間をかけることなく、公明正大に自由に浮かれ気分、魔法の笛を使って頭角を現し、市場において商人としての最高位にまで昇りつめるつもりだ。そして言うておが、ラグビーチームのベクティヴズも私を止められないだろう。フン、眠ることのない小魚の神、知者ソロモンの力を借りて、ブローグ【粗革製の頑丈な靴】やキッシュ【鉄が凝固する際に分離される単体の黒鉛】のごとく、私が金から金を産み出すのを誰も止められないだろう。アルスターのライフル射撃隊、ヨークの民兵、ダブリンの火打石射撃隊、コナハトの騎兵隊、これらが束になっても私を止められない！私はシャノン川を斧で切り裂き、リフィー川を飛び越え、一方向に流れるブラックウォーター川の水を飲み干す。愛する者よ、初なお前にとって、ヒヨッコにとって、これはどう感じられるか。親愛なる神聖な貴人たちを始末することは自然なことすぎない。見ろ！私の背後を清掃するブラシ工場のヴァリアンズ社のようなものだ。花嫁である白雪姫よ、お前が本来いるべきところを自覚しないうちに、私は私の心を燃え上がらせる乙女を連れて行こう。私は人が驚嘆するような人間となり、なりふり構わずに何トンものアカツメクサにお

前を乗せて、メトロノーム 99 の速さで、忠実に高みへと、一層の高みへと、最高の高みへと連れて行こう。聖人ペテロとパウロの力を借りて、見目麗しいシーラよ、私はお前を心から大切に！お前はただただフィーズを満たし、音を立てずにシャルトリューズのビンを開け、ペイルに入ったきらめく氷をかき回し、氷の回る音を聞いていけばよい、幸せな少女よ。それ以外することは全くない。しかしお前は再び詮索し、問いたがるだろう！聞け、私に立ち向かうことはできないのだ。私の妻よ、実際私の異端者としての名前が K.C. 即ち「勅撰弁護士」であるのと同様、私は策士であり、我々が至福を射止め、我々の第七天にお互いどっぷり漬かるまで、お前を自由に飛び回らせるつもりはない。そそっかしい陽気な少女よ、この第七天では、私は一流のディーラーなどになって、簡単に 100 万ポンド程度の金を作り、各部屋の中の最も豪華な家具のついたいくつかの仕切りそれぞれに置かれた、賞賛のあまりただただ言葉も出ない、贅が尽くされた電動のクッション付き長椅子にお前を座らせよう。ただ一つ、私がどんなに有名になろうとも、いいか、私は雨をもたらす神のことが非常に気掛かりなのだ。[452] 自分の下らない話はどうでもいいが、寒さの中、デー人々を滅ぼすであろう朝まで荒れ狂う恐ろしいまでの風雨のこと、私の極めて澁刺とした健康状態の半分でも悪影響をおよぼす彼の一連の事件のことを考えると私は非常に不安になる。そしてもう一つ、これは確かに不意に口から漏れてしまいがちな真実なのだ。聞く者に満足を与えようと虚偽のことを口にするのは、どんなに些細なことであれ決してない。私は戯言を言っているのではない。居住まいを正して語っている。まじめに喋っているのだ。クシュン！

親愛なるシーラよ、そう遠くない昔、アイルランドの詩人デニス・フローレンス・マッカーシーの書の中の書簡の箇所を読んでいた時のように、つまり三脚台に座り、どれくらい長くホース岬やチャペリソッドに自分が居続けたいのかと、この作者と同じように考えながら、そしてまた暖炉をちらっと見たり、ちょっとした瞑想に耽り、楽曲をあれこれ選びつつ床の上のグラモフォンに耳を傾けながらそうしていた時のように、私の前頭部である額と体軀を見れば分かるだろうが、私は崇高なる今宵、まさに悲しみに浸りながら、この恵みを授ける使命をもって、牛も死んでしまうようなゆつたりとした音楽に合わせ、ざっくばらんで幸せな気分が我々の家から出ようとしている。しかしこの使命は、我々の——お前は彼女【ALP?】のことをこのように言うことが頻繁にある——澁刺とした生活を記しており、また最初のファラオから次のファラオ、そして最後の最高のファラオであるラメスまでの死者の沈黙を土台とした、見事なくらいに落ち着きのある年代記全体に表されている、内密で深遠な、歴史上最も栄光に包まれた使命なのだ。ヴィーコの描く道が円を描きながら続き、言葉が始まる地点に出会う。未だその円環に魅力を感じ、その循環に驚き

もせず、その義務となった私のすばらしい使命に関して、お前はいらだちも感ぜず、我々は皆晴れやかな気持ちでいる。私には誇りから来る力がみなぎっている（その健全な力に賞賛あれ！）。というも、王に会おうとすることは、いやそれも夜の帝王ではなく、アイルランドのあちこちを治める王に会おうとすることは、確かに偉大なことだからだ（すばらしい！）。いやしくも、アイルランドに畑が存在する以前にルーカンには君主が住んでいた。新婚の男の身にあとで起るはずのあらゆることが、我々にはっきりと分かるのと同じように、この味気ない世界で起るはずのいかなることも、みんなにはっきりと分かってもらいたい、それだけを私は願っている。さあ、乾草の種子を買うようお前に1ギニー渡そう。このことを母親に言え。そして彼女の母親に言うように母親に言え。そうすれば彼女は愉快に思うだろう。

フン、ここでのくだらないことの思い出など全部くそくらえだ！というも、ヨシュアに向って明言するが、私はうんざりし始めているからだ。私は無意味にノルウェー人になっているのでは決してない。[453] ああ、我々のこうした時代が穏やかに終わりを迎えるのは、君たちがそうならないことを願っていても、それほど遠いことではない。そこで今私は君たちにお願する。私の春のみすばらしい通夜のときに大騒ぎしないでくれ。君たちが訳の分からないことをぺちゃくちゃ喋りながら、ホームズ対モリアティーのように、私のことで喚き立て決闘し、ついには食事の会を馬鹿にして、厚かましく騒がしくもたわいない自慢話をしたりして、最後に塩漬けのサバを吐き出し、そのあとスタウトをも吐き出してしまふ、分かっているだろうがこのようなことはないようにしてくれ。そしてまた慈善裁縫会するとき、暖炉の中に醜悪にも痰を吐き、メランコリックな気分させないでくれ。大幅な割引額で買った女中服を普段着にするのはやめてくれ。お尻を床につけて座ってでも、ストッキングはすり切れるまで使ってくれ。不運なことにメンスが始まり、織物も出て、粘液に刺激が加わっても、今私が言った体の部位のまわりをいつもきれいにしておいてくれ。朝食を最後の晩餐やサロンでのお茶会のように変えてくれ。『ガリバー旅行記』を読みながら、ごく短い時間でもギシギシいう椅子にだらけた姿で座っているのもやめてくれ。君たちの不活発な耳を猛烈に働かせよ。みんな犬ころと一緒に森の中を歩いている間は、禁制という名の聖人や不興に陥っているショーンに祈願せよ。夏の間は男から身を守るため、栗のイガを持ち歩け。こうすれば、冷たい堅物の北風も彼の子供たちを抱き締めよう。一方で私の言動を見習え。そうしてくれば、大いに私の楽しい祝いの日となるのだ。けがらわしい数多くのあのようなウジ虫のような女たちを見るくらいなら、いっそ私の舌がただれてしまうがいい！昔々酒があった、そしてそれはかなりいい酒だった、そして君たちのたわいもない話の残りが続いた！姿を消した郵便配達人ショーンのためには、暖炉のそ

ばに質素な椅子が一つだけあればいい。そして君たちが結婚の承諾をしたのなら、すぐさま私は君たち皆を私の東半球としよう。このガラスの小窓を覗いてみよ。そうすれば私が歌を歌いながら帆を広げているのが見えるだろう。パリが君たちの頭の中に入っているのなら、何ゆえ飾り物など必要なのか。心を奮い立たせよ、みんな、エロイズとかそういう女になってくれ。私はさまよいながらも、そのことで君たちに悲しい思いをさせたりはしない。私の貧弱な頭で考えることだが、誓約したことがすべて破棄されても、たとえ私が命を失おうとも。さあ、以前よりもよき時代が君たちを待っている。骨の果樹園で【墓の中で】。いつかごく近いうち40年間姿を見せていた雲が消える時、エリクション【ギリシャ神話で善人が死後行くところ】である夜の野で、時が失われた地において、おそらく選ばれた者の中でも精鋭である我々は、互いに交わる者として皆結ばれ幸せになるであろう。ヨハネスバークが姿を現わす！決して死に絶えることのないダイヤモンドに覆いをかぶせよ！そうすることでヨハネスバークからこの孤高の代物【ダイヤモンドのこと】を取り除け。淑女たちよ、どうか酒を飲み干してくれ。それを貶めるのと同じくらいにできるだけスマートに。四旬節などくそくらえ！説教には拍手を！断食の時期は過ぎ去った。[454] 君たちと私は今直ぐ別れなければならない。それゆえいついつまでも君たちの世界を作っていけ！別れも楽しいものだ。愛する者よ、この指輪はお前のものだ、もっていけ。今このときお前は私の腕から放たれるのだ。さようなら、愛しい者よ、さようなら。ハハハ！ハハハ！私の宝物たちよ、確かに郵便配達人は何の意味もない文に意味を見いだす者と度々思われている。私は署名する。大いなる愛を込めて。敬白。郵便配達人ショーン。以下次回に。幸運を祈る！

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (N.Y. Viking Press, 1947) を使用した。本文中の [] 内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。() 内の日本語は、原典の () 内を訳したものである。参考文献としては、以下の書を使用した。

1. Campbell, Joseph and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. 1944; rpt. N.Y.: Viking Press
2. Rose, Danis and John O'Hanlon, *Understanding Finnegans Wake; A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982
3. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised edn. Baltimore and London: John Hopkins University Press, 1991.
4. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
5. Mink Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I, II, III, IV、河出書房新社、1991年
7. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第2章の概要(1)**大島 由紀夫**

(東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

要旨： ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第3部第2章の429ページ1行目から454ページの7行目までを訳出した。逐語的に訳した所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した所もあり、「概要」といった題名にした。この訳出した箇所では、ジョーンとなったショーンの、28人のレインボーガールズ(女子学生)及び妹イシーに対する説教が記されてある。

キーワード： フィネガンズ・ウェイク、第3部第2章、概要